

永井先生からのメッセージ No.1

～元小学校の先生から保護者の皆さんへ～

2022年 7月21日(木) 野毛山幼稚園

元小学校教諭 永井 裕

【 情 緒 の 水 】

- ▶ 大勢の先生を前に話を始めるとき、私はまず近くに座る先生にこう聞くことにしています。
「先生のクラスで、『この子はいい子だなあ』という子を、一人思い浮かべてください。
頭がいいとか、利発とか、そういうことよりも、むしろ人として……です。」
- ▶ しばらく間を取り、参加者全員の頭の中にも、少なからず「特定の児童」が描かれた後、
「もしかすると、今思い浮かべたお子さんの、その保護者の方って、すごくいい人……
ということ、多くありませんか。」と問うと、ほぼ100%の先生方がうなづきます。

- 20世紀の日本が生んだ大数学者「岡 潔(おかきよし) 氏。
その著書『情緒と創造』の中に次のような文章があります。

人権感覚

道徳性

人間性

- ▶ 情緒が情緒の中心を経て、大脳新皮質に送られそこに貯蔵される。これがその人の **内容** である。そして貯蔵された情緒は、再び水の出口から「内に意欲を秘めた感情」となって出る。
- ▶ 教育が大切なのは、次の時代を作る人たちを育てるからであり、教育が恐ろしいのは、それが大脳新皮質の発育期にあたるからである。後者について言えば、教育は、教え子の顔まで変えてしまう。大脳新皮質の発育不良は道徳的価値判断の低下をきたし、真・善・美を創り出す働きも、うまく働かなくするのである。



- ▶ 例えば、夕日を見て、「きれいだねえ」という感動を親が子に伝えたとき、二人の中に『情緒の水』というものが貯まる。そして、その水こそが、その人の人間性とか道徳性とか人権感覚を豊かにしていく……というのです。
- ▶ この例に限らず、芸術に接して心がふるえるとか、清々しい気分になるとか涙があふれるとか。またある時は、がんばったことに達成感を覚えたり、人の役に立つ喜びを実感したり。こうした人間の営みの一つ一つに対して、親子で共感、共鳴し合いながら、互いの『情緒の水』を貯めていく。これこそが教育の原点。岡先生に言わせれば、「いい保護者の子は、いい子になる。」それは至極当然のこと、ということになるのでしょう。



- ▶ 「乳児は肌を離すな」「幼児は肌を離して、手を離すな」「少年は手を離して、目を離すな」「青年は目を離して、心を離すな」。『子育て四訓』として知られる言葉ですが、親から子へと『情緒の水』が注がれていく、そんな光景が目に見えます。特に、これから迎える少年期。「目を離すな」は、監視せよという意味ではないと思います。表情や仕草のちょっとした変化、子どもからのサインを見逃すことなく、『情緒の水』を注いであげてほしいと願っています。